ーセントが完成している。したがって普通に発達しておれば、五、六歳ころで発音の機構が成熟するという考えは妥当である。しかし、音声器官が成熟したからといって正しい音が発せられ、日本語が上手に語られるとはいえない。そのためには学習（練習）が必要で、日本の子どもがすべて正しい音を発するのは八歳ころであろう。ここ着眼し、これをひとつの基準で測定し、発達の程度を知り、幼児教育に役立てることのために、発音発達検査を標準化することを思いついたのである。

〔手続〕

あらゆる音について検査することは無駄である。子どもが比較的発音し難い音について検査することにした。構音の困難な語音はいろいろ変化して幼児語を特徴づけるが、これらを調査すると次の通りである。

(A)甘ったれたことば、たとえばサ行がタ行、またチャ行になる等、
(B)発音のみだれ、たとえば音、音節、子音が省略されたり、音が全然乱れる等、
(C)A小学校の一年生の二月の作文を調査したところ、発音に原因があると思われる文章の間違いは、男児は二三中一二人。女児は二四人中一五人であった。同じ対象が二年生になった時の一月の調査では、男児は二三人中八人、女児は二四人中九人であった。内容は大体(A)と(B)のものであった。

これらを綜合すると、構音の困難なものは次の通りである。

(1)転化、困難な音を容易なものに代用する。
(2)省略、ことばの中に出てくる特定の音が多少習慣的に省略され、脱落する。
(3)逆転、音節が逆転する。
(4)同化、ある語音がその前にある音、またはその後に続く音に影響されて、同種のものに変化する。
(5)混乱　いろいろのものが組合っている。発音のあやまりには個人差はあるが、これで大体中核的な型があるように思われる。それで次の音について検査するのが妥当であると考えた。カ行、サ行、ハ行、ラ行、ガ行、ザ行、チャ、チュ、チョ、シャ、シュ、ショの三六音である。

そして検査のためにひとつの案を作成した。これをカードに絵を描き、仮名を記入して個別的に検査することにした。「自発」というのは自発的に発した音が正しいかどうかを検査することであり、「模倣」というのは、自発的に発したものが誤った時に、正しい音を示して模倣せしめ、その模倣が正しいかどうかを検査することである。各音に一点ずつを与え、総計二一五点を満点として集計した。

「幼児の道徳性に関する研究」

早稲田大学　市村尚久
日本女子大学　村山貞雄
愛育研究所　江渡礼子

(一)

道徳が社会の是認する規準によって成立する概念であるとすれば、現今ないし今後の民主社会での幼児期の道徳的特性は、どのようなものであるか、さらに幼児を正しく指導し、望ましい社会人に

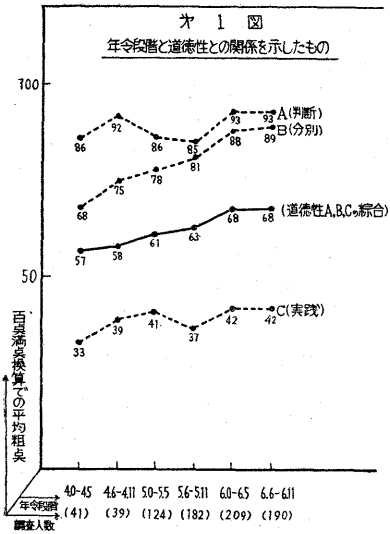
みちびくという指導的立場から、幼児期の標準尺度ともなるべき道徳的特性はどのようなものであろうか、という問題に研究意義をもって本研究ははじまったものである。

そこで、まず最初になされた研究手続きは、道徳性の抽出のための用具の作成設定にかんすることであり、その結果「幼児用道徳検査」(日本保育学会第10回大会発表要旨3頁—6頁参照)として一応完成し、標準化手続きをとるにいたった。

つぎにこの「幼児用道徳検査」を調査用紙とすることによって、幼児期の道徳性の特質、主として道徳意識の発達変化や特徴をとらえようとするところに研究の主目標をおいたのである。

このような目標にむかって研究をすすめてきたわけであるが、今回の発表はその中間報告として、昭和三十二年五月十五日現在までに調査済みの資料をもとにして、今後のより具体的な研究項目や技術などを推定するために単なる比較検討の操作をこころみた結果にすぎないものである。

第1図
年令段階と道徳性との関係を示したもの



(二)

都市の幼稚園三か所、市の保育所六か所町村の保育所四か所からの四歳〇か月から六歳十一か月までの計七百八十五名の幼児よりえられた、年齢別、徳性別についての傾向は、つぎの第1図のとおりである。平均粗点でもって比較検討の基準にしているが、年齢別平均点の有意差検定の結果、すべて五パーセント内の危険率で十分みとめられたゆえ、それぞれの平均粗点は、そのまゝ比較されてほぼさしつかえないといえるものである。

第1図からまず「判断」という徳性が、年齢段階にしたがって、どう変化しているかをみると、五歳代が四歳代前半の平均粗点とほぼ同じであるので、四歳から五歳にかけては発達するといえるかどうかは疑問である。が「判断」という徳性は四歳以前にすでにいちじるしく発達して、四歳あるいは五歳で一つの頂点に達するのではないだろうかという推測がつく。

つぎに「分別」という徳性については、年齢がますとともに六歳代前半まで平均粗点も増加している傾向は、「判断」という徳性に比較して幾分長い時間(成長)をへなければ形成されない特性が「分別」といえよう。規範的な善悪の単純な判断は、四・五歳頃にすでについていても、場面にのぞんでの、複雑な環境を考慮しての判断、すなわち「分別」という徳性は六歳頃までかかって標準の発達段階にいたるようである。

「実践」という徳性にかんしては、第1図だけの範囲では、ただわずかではあるが年齢にほぼ平行しているといえる程度にとどまる。

以上の三徳性を綜合した「道徳性」(道徳意識というべき性質のものである。分別とか実践という徳性を綜合していても、質問紙法を通して得られた結果は、意識の面に強力に統一された徳性のプロジェクトに外ならないと考えられる。)をみると、六歳台の前半まで絶えずゆるやかではあるが上向きの発達を示している。これは「道徳

意識」というものが幼児期において人間の成長（年齢的発達）と平行していることを物語ると解されよう。

（三）

さて、第1図からいくつかの読み取りをおこなったのであるが、もっとも顕著な特徴としての「ゆるやかな上向きの勾配」は何を意味しているのであろうか。これより、今後の研究方向に指針をあたえるものとしてつぎのことが推定される。

幼児期の道徳意識の発達は、知能などのようにいちじるしくなく、非常に緩慢に押し進められるようである。あるいは一定の道徳意識が形成されたら、それ自体強力な持続性をもつようである。したがって、いまかりに道徳年齢というものを考えるなら、これは知能年齢のように一か月単位で個人差をあらわすような性質のものではなく、おそらく半年乃至一か年というような比較的長期間をもって、道徳意識にかんする発達程度の表示尺度とすべき性質のものと推定される。

幼児の反抗期についての一考察

松濤幼稚園　林　貞子

幼児における反抗期の存在は古くから認められているが、これを客観的にとらえうるか否かを検証する。次に反抗期の発生条件として、何らか数量的に測定できるものがあればやがて反抗期の予測も考えられると思われるので、その第一歩として、反抗期開始の時期と、身長体重の変化、幼児の世界観の分化程度および話しことばの内容の発達の間に何らかの傾向を見出せるか否かを検証することを試みた。まず第一に幼児の家庭より質問紙によってその幼児の反抗期の有無、有ればその開始の時期の答申を求め、これと幼稚園での受持教師の日常の観察による反抗期開始の時期と照合した結果次のようになった。

総数　七〇名　（満三才～六才の幼稚園児）

完全一致…二〇名　一～二か月のずれ…十二名、三～四か月のずれ…八名、五～六か月のずれ…二名、七か月以上のずれ…二名、入園前の者…十二名未経験の者（この中には未経験のまゝ六才にいたるものも多数あり。）……十四名。

この評価のずれの絶対値の合計は七・五か月で一人平均一・六八か月である。この事実は反抗期がある程度の一致した評価のもとにとらえられるものであることを示している。次に第二の問題については身長・体重を示す累積線の上に、反抗期の開始の時期を置く、まずそれぞれの累積線を構成している各点を通じてその点からもっとも脱逸度の少いと思われる位置に直線をあてはめる。次に反抗期開始の時期の前後二か月合計四か月をとり同様に直線をあてはめる。この二本の直線と水平線とのなす角をそれぞれ∠A、∠Bとして∠B/∠Aをとる。この比を一・五以上のプラス群、一・四～〇・四までの1群、一・五以下のマイナス群に分けた結果は次のようになった。

反抗期を経過した者の総数　四〇名

身長（十群…5名、1群…30名、一群…5名）

体重（十群…13名、1群…10名、一群…17名）